

# 1999 年度 人文学研究所活動報告

## I. 講演会

6 月 18 日 (金) 「ことばと物語のインターフェイス」

池上嘉彦 (昭和女子大学教授)

6 月 26 日 (土) 「東南アジアの金融・通貨危機と華人資本の動向」

廖 赤陽 (武蔵野美術大学助教授)

7 月 7 日 (水) 「ヴェネツィアの近代化と三人の文学者——マリネッティ, ラスキンの, レニエと機械性の問題」

鳥越輝昭 (神奈川大学外国語学部教授)

## II. 『神奈川大学人文学研究叢書 (16)』刊行

『ロマン主義のヨーロッパ——人文学研究叢書 (16)』(勁草書房, 2000 年 2 月 5 日刊)

### 目次

まえがき

#### 1. 闇と悪の系譜

——ドイツ・ロマン主義への一視角—— .....伊坂 青司

#### 2. イギリス・ロマン派の詩と絵画における想像力

——ブレイク, ワーズワス, ターナーとコンスタブル—— .....岩崎豊太郎

#### 3. イギリスのロマン主義とダンテ

——コウルリッジのダンテ観—— .....奥田 宏子

#### 4. スタール夫人におけるロマン主義理論の形成 .....佐藤 夏生

#### 5. ルソー, ロマン派, フェミニズム覚書 .....松山 正男

#### 6. ヴェネツィア, 未来派, 過去主義者

——マリネッティ, ラスキンの, レニエと近代化—— .....鳥越 輝昭

#### 7. ロマンティシズムとピューリタニズムの相関性 .....近藤 正栄

## III. 浙江大学との学術交流

「第 9 回日中学術交流シンポジウム」の開催

日 時: 1999 年 11 月 8 日 (月) ~ 9 日 (火)

会 場: 神奈川大学 17 号館

11 月 8 日 (月)

開会の挨拶: 日高昭二 (神奈川大学外国語学部長)

鈴木陽一 (神奈川大学人文学研究所所長)

#### 1. 鈴木修一 (神奈川大学外国語学部教授)

「日本における最初期のニーチェ受容の一側面」

2. 鳥越輝昭（神奈川大学外国語学部教授）

「ラスキンとブルクハルトの捉えたイタリア・ルネサンス」

【シンポジウム：中国人日本留学史研究の現段階】

開会の挨拶：山口建治（神奈川大学外国語学部教授）

大里浩秋（神奈川大学外国語学部教授）

「留学関係資料調査の中間報告」

阿部 洋（福岡県立大学人間社会学部教授）

「『対支文化事業』下の中国人留学生受け入れ問題」

田 正平（浙江大学教育学部教授）

「九十年代における中国近代留学史研究の概観」

呂 順長（浙江大学日本文化研究所講師）

「清末浙江籍の中国人日本留学生の研究概況」

孫 安石（北海道大学法学部専任講師）

「満州事変と日本在留中国留学生について—排日と取締りの構造」

コメンテーター

蔭山雅博（専修大学教授）

高田幸男（明治大学助教授）

周 一川（お茶の水女子大学助手）

討 論

11月9日（火）

1. 西 和夫（神奈川大学工学部教授）

「大工道具が文化を語る—道具を押すか引くか—」

2. 陳 村富（浙江大学哲学学部教授）

「古今文化交流範式の研究」

3. 廖 可斌（浙江大学人文学部教授）

「『楊家府世代忠勇演義志伝（簡稱『楊家府演義』）中人物形象的生成与該小説的演变」

4. 黄 時鑑（浙江大学歴史学部教授）

「三百六十行：一九世紀中国の市井風情」

全体の総括

次年度以降の学術交流のありかたについて討論

IV. 共同研究グループ

ロマン主義研究グループ

1. 研究会の開催：1999年7月7日（水）16:30～18:00

「ヴェネツィアの近代化と三人の文学者——マリネッティ、ラスキン、レニエと機械性の問題」

発表者：鳥越輝昭氏（本学外国語学部教授）

（この研究会は、1999年1月27日（水）に予定していたものであった。）

2. 合評会の開催：2000年2月に本研究グループによる神奈川大学人文学研究叢書『ロマン主義

のヨーロッパ』が刊行された後に、合評会を開く予定である。

(岩崎豊太郎)

## 日中関係史

### 研究会等の開催

- (1) 6月2日(水) 今年度活動についての打ち合せ。
- (2) 11月8日(月) 本学と浙江大学との学術交流シンポジウムの一部として、「中国人日本留学史研究の現段階シンポジウム」を主催した。内容の詳細は、本の形にまとめて近々紹介する予定である。

(大里浩秋)

## 文化のかたち

### 〈目標〉

1. 文化、文明の総合的な把握をめざす。
2. 「混沌」「混迷」の時代を迎え、21世紀、新「千年」にふさわしい「知の地平」をひらく。

### 〈活動〉

個々人の、あわせて、グループの研究活動を活性化していき、近い将来、成果を「叢書」にまとめたい。

- (1) 資料収集につとめつつ、(2) 外部から講師を招き、講演会・研究会を、催したりしてきた。

研究会・講演会の開催：1999年6月30日(水) 16:10～17:30

「日本の芸能—伝承と「かたち」

講師：赤坂治績氏(演劇評論家)

### 〈今後の展望〉

研究会・講演会などグループとしての活動とともに、個々人のフィールド・ワーク、取材・調査を活発にしていく。

(中本信幸)

## 比較研究：笑いのコスモロジー

1998年度(1999年3月)には、1995年以来の活動成果の一部が叢書『笑いのコスモロジー』として刊行された。本年度になって、同書の書評が幾つかの雑誌や新聞に掲載され、幸い、好意的な評価を得た。

ただし、長年にわたる本グループの研究成果は同書に収録された論文に尽きるものではない。何名かのメンバーは、本年度も『笑いのコスモロジー』に続く著書の公刊に向けた活動の継続を強く希望した。これを受けて活動の継続を鋭意検討したが、研究代表者の都合で計画を首尾良く実行に移すことが出来ず、結果的には、ニューズレターを幾度か発行するだけの不本意な活動に止まった。

(小馬 徹)

## 西洋文化の受容—訳語と思想—

本研究グループのメンバーは、言語、思想の研究者であり、主に近代を対象としている。本年度も前年に続き「明六雑誌」をテキストに講読会を中心に進めてきた。月1回のペース(合宿を含め14回)を申し合わせている。メンバー以外にも公開しており、院生などの参加もあった。

こうしたグループによる基礎資料の丁寧な講読は、若い時代はともかく、次第に時間に追われてな

かなかできなくなる。その意味で、お互いに有意義な研究会になった。とくに、言語の研究者と思想の研究者という取り合わせも議論を沸騰させた。途中から西洋史の研究者も参加して賑わっている。この講読会は、もう少し続けることになっている。また、これを足場に、グループ名である「西洋文化の受容—言語と思想」を叢書でまとめる計画（2002年）が進んでいる。

（高野繁男）

## 物語研究

### 〈活動報告〉

第1回共同研究会 1999年6月18日

講演者 池上嘉彦氏 演題 ≪ことばと物語のインターフェイス≫

物語共同研究会は、1999年に発足した訳ではないが、今回初めて、具体的活動の一つとして第一回研究会を開催した。初段階であるので、物語とその構成要素となる言語との関係を認識する目的で昭和女子大学教授池上嘉彦先生に認知学的そして記号論的立場から文学作品や伝承文学の分析方法を広範囲にわたって講義を拝聴した。人間の言葉による表現が物語を形成するのに認知的視点からみた時、各言語の持つ特性に基づいて如何に環境に依存しながら我々が〈語り〉を実現しているのかを更めて認識した研究会であった。

第2回共同研究会 1999年7月28日

今後の叢書の刊行に向けて具体的なテーマを話し合った。

日高昭二先生の提案による『想像する平安文学』（全10巻）の枠組構成を参考にしながら物語共同研究のテーマの大枠を相互に確認した。各自のテーマに沿って活動を始め来年度（2000年4月以降）会合を開くことを決めた。

編者は日高昭二。2002年度内に出版予定。原稿締切は2002年1月末日。

以上1999年度の会合活動は終了した。

（古岩井嘉蓉子）

## ジェンダー・ポリティックスのゆくえ

### 1. 活動報告

本研究グループでは、来年度に叢書の刊行を実現したいと考えており、今年度は叢書の枠組みや各自の論文の内容等についてグループで検討しながら、メンバーが各自論文の構想づくりをすすめてきた。今年度中に叢書の原稿をまとめることをめざしている。

### 2. 研究会

(1) a. 日付：1999年5月31日

b. テーマ：ジョーン・W・スコット「ジェンダー再考」（『思想』1999年4月号）について

c. 発表者：笠間千浪

(2) a. 日付：1999年7月22日

b. テーマ：叢書の枠組みと各自の論文の構想について

（入江直子）

## 東南・東アジア社会の比較研究

### 1. 目的

本研究グループの目的は、近現代の東南アジアの諸社会に関する政治・経済・文化についての研究を行なうことにある。とくに神奈川大学の複数の学部にも所属する教員が、ネットワーク型の

研究組織をつくり、これを維持し発展させることをめざしている。

## 2. 活動内容

①「神大・東南アジア・フォーラム」と共同で、年数回にわたり研究会を開催し、適宜ニュースレターを発行する。研究会は原則として公開で行なう。

②会員による研究発表のほか、さまざまな地域を研究対象とする学内・学外の研究者を招聘し研究会を行なう。

本年度は3回の研究会を開催し、ニュースレターを2回刊行した。

## 3. 研究会

本年度に開催された研究会の日程・報告者・報告論題・出席者数および報告要旨は以下のとおりである。

### 第1回研究会（1999年6月26日）

報告者：廖 赤陽氏（武蔵野美術大学助教授）

論題：「東南アジアの金融・通貨危機と華人資本の動向—非制度的経済と制度的経済との接近—」

参加者：本学教員6名、本学大学院生2名、他大学大学院生1名、社会人2名（合計11名）。

報告要旨：（前掲、人文学研究所講演会要旨に同じ）

### 第2回研究会（1999年10月16日）

報告者：園田節子氏（東京大学大学院総合文化研究科博士課程在学）

論題：「19世紀後半南北アメリカへの華人の移出と初期駐米公使の研究」

参加者：本学教員5名。

報告要旨：

19世紀後半に清朝中国から南北アメリカに華人労働者が大量に移民した。こうした状況のなかで、清朝は、アメリカへの華工の移動への対応を迫られた。清朝は「遣使（常駐使節の派遣）」を日本の台湾出兵（1874）を契機に本格的に検討し始める。初代出使アメリカ大臣は1875年の上諭で任命、1878年の論旨で派遣が決まった。以後、職業外交官の技能を備えた伍廷芳が第6代出使アメリカ大臣に就く1896年までの出使アメリカ大臣の活動に焦点をあてると、積極的な「僑務（中国の政体が国内外で展開する在外華人に関する議論・政策・実施）」を展開する、といった特徴が見られた。

### 第3回研究会（2000年1月22日）

報告者：藤村是清氏（神奈川大学外国語学部非常勤講師）

論題：「海南島海関貿易移民報告 1876～1931年——ジャンク・移民・豚」

参加者：本学教員4名、他大学教員1名、社会人2名（合計7名）

報告要旨：

小なりとはいえ華僑の5大出身地の一たる中国海南島の移民と貿易に関する実証的報告である。骨格は、同島瓊州海関の各年次報告の貿易移民統計を収集整理して作成した同島海口港の貿易推移表と出入港者推移表の提示にある。また、海関統計における香港経由中国産品の「外国品」扱いの問題点。ジャンクの根強さと共に、東南アジア移民の往来と広東方面への豚移出とが並行的に進んでいることの意味も探究する。

（永野善子）

## 歴史とユートピア

### 〈活動報告〉

この共同研究は、壮大なテーマを掲げて恒常的な研究活動を続けてきたが、成果を世に問うに至

らなかった。今年度は具体的に成果を世に問う段階にきたと判断し、本学で新たに始まった共同研究学術奨励金に「歴史とユートピア思想の研究」というテーマで応募し、1999年、2000年度で計250万円の奨励金を支給して頂くこととなった。この計画には、中島三千男、寛 敏生両氏にも新しく参加をお願いした。

「歴史とユートピア思想の研究」の「共同研究の目的及び具体的テーマ」を以下に掲げておく。

人類史は理想世界を構想し、その実現に向けて歩む人間の歴史であった。特に宗教が万能であった近代以前とは異なって、理性と科学の時代となった近現代には、社会改革・科学的社会主義・ファシズム・ナチズム・天皇制国体運動・反帝反ファシズム運動・民族解放運動、それに自由主義等の、人類解放を標榜し、確信する諸々のユートピア思想・イデオロギーが、真の正義をめざし、全世界を巻き込んだ抗争をくりかえしてきた。しかし、その多くの構想と実践は挫折するか、あるいは予想もしなかった悲劇を生み出したのであった。何故か。こうした歴史の悲劇に関心のある、日本史、中国史、西洋史を専攻する研究者が、他の多くの歴史家の参加を得て、共同で近現代のユートピア思想・イデオロギーの再検討を行なわんとする。

上記の主旨に基づいて以下の活動を行なった。

①第1回共同合宿研究会（1999年8月25日～27日、2泊3日、山中湖にて）

報告

- 小島晋治 「歴史とユートピア—20世紀の一つの総括—」
- 佐々木潤之介 「ユートピア？ 解放幻想と蝦夷」
- 中村平八 「東洋経済史は可能か」
- 後藤 晃 「満州農業移民とユートピア」
- 的場昭弘 「マルクスとユートピア—歴史研究における偶然と必然—」
- 小林一美 「中国共産党肅清史の研究」
- 山田 徹 （討論参加）
- 岡島千幸 （討論参加）

②講演会の開催、1999年12月17日、セレストホールにて。

辻井 喬 「歴史とユートピアの消滅」

共同研究のテーマを外部から講師を招いて、学生・市民と共に考え、討論しようと計画した。この日の参加者は市民約100名、学生約80名であった。辻井 喬（本名、堤 清二）の講演は、現代の混迷する状況を批判し、日本の歴史と文化の再生をめざして、歴史とユートピアの関係性を問い、さらに現代文明に対する根本的疑問を提起する意欲的な講演であった。

③共同研究会 1999年12月17日夜、人文研にて

岡島千幸「17世紀イギリスの農民運動の心性について」

参加者 中村平八、後藤 晃、山田 徹、中島三千男、寛 敏生、小林一美の6名。

④第2回共同合宿研究会 2000年3月16～18日の2泊3日、伊東市にて開催。参加者は、上記の11名。全員報告。

共同研究の成果は、2000年9月までに、各自の研究の成果を原稿用紙50～60枚程度にまとめ、2001年の秋までに出版をと計画している。

（小林一美）